

CitizenScience.Asia

アジア圏における市民科学コミュニティの紹介

宮下絵夢フェリチタス (Emu-Felicitas Ostermann-Miyashita)

Leibniz Centre for Agricultural Landscape Research (ZALF) 博士課程

CitizenScience.Asia (CitSci.Asia) はアジア圏での市民科学を促進するために、アジアに現存しているプロジェクトの可視化や国家間および各国内における市民科学プロジェクトのネットワーキングに取り組んでいる団体です。

CitSci.Asia の大きな特徴の一つとして挙げられるのは、ヨーロッパの ECSA (European Citizen Science Association) やアメリカの Wilson Center などアカデミック界から成立した市民科学コミュニティとは異なり、本職を別に持つ「市民」が自ら立ち上げた組織であるという点です。2017 年 5 月に設立されて以来、順次新たなメンバーが加わり現在では 9 か国、21 人が運営チームメンバーとして活動しています。メンバーのバックグラウンドは IT 系の専門家や学校教員、市民科学プロジェクトのマネージャー、学生など実に様々です。



CitizenScience.Asia のロゴマーク

CitSci.Asia が発足するきっかけとなったのは、2016 年にアジア圏でのジカ熱の拡大を懸念した香港市民によって立ち上げられた Zikathon という市民科学プロジェクトでした。プロジェクト企画の中心人物の一人であった IT 専門家が、Mosquitoalert というスペインに既に存在していたアプリを中国語に翻訳したことによって、市民が香港市内の蚊の目撃場所や生息域を地図上に示すマッピングを可能にしたものです。具体的な内容は以下のリンクからご覧になれますが (<https://medium.com/citizenscience-asia/happy-citizen-science-day-59d192016d12>)、本プロジェクトは政府が発表していたデータよりも正確で緻密な地図を公開し、素晴らしい成果を出した市民科学プロジェクトとして世界的に注目を浴びました。この結果を受けて Zikathon の企画メンバーは蚊に関わる様々な国際会議に招かれ、世界各国の市民科学プロジェクトや、それらを地域ごとに束ねている ECSA などの市民科学コミュニティの存在を知りました。世界的に市民科学の注目度が高まっているなか、アジア圏において未だ市民科学コミュニティが存在しないことを知った Zikathon プロジェクトの企画者が立ち上げたのが CitizenScience.Asia という市民による市民のための市民科学コミュニティでした。香港で既に活動を行っていた市民科学プロジェクト関係者や地元の学校において市民科学を授業に取り入れている教師陣などを中心に、アジア各国において市民科学に関わっている人をスカウトすることで、まずは運営チームを設立しました。私に声がかかったのはドイツに留学をしていて市民科学をテーマに研究を行っていた 2018 年 1 月頃でした。当時執筆中だった市民科学論文の調査のため度々訪れていたベルリン自然科学博物館にある ECSA の本部の方からの紹介で、香港在住の CitSci.Asia 創設者の一人と Web 面接を行いました。同年 4 月に帰国予定だったので、以来現在に至るまで二年以上にわたって CitSci.Asia の日本代表 (Japan Ambassador) 及び運営チームの一員として活動をしてきました。日本での具体的な内容としては、既存の市民科学プロジェクトの把握や活動紹介、実際に複数の市民科学プロジェクトを招待したワークショップの企画や学会での発表などです。

South China Morning Post HK CHINA ASIA WORLD COMMENT BUSINESS TECH LIFE CULTURE SPORT WEEKEND
1083 SHARES f t + NOW READING
Hong Kong citizen scientists localise mosquito tracking app to let people report sightings of the disease carriers

Hong Kong citizen scientists localise mosquito tracking app to let people report sightings of the disease carriers

The Mosquito Alert app, which creates a database of the insects' breeding areas, was recently shown to the UN in Geneva, and should make up for lack of information from the Hong Kong government

PUBLISHED : Tuesday, 30 May, 2017, 6:47am
UPDATED : Tuesday, 30 May, 2017, 6:47am

COMMENTS: 4



Zikathon の活動を紹介した記事

市民科学アジアは以下の 4 点を目標として掲げています。

- 1) 市民科学に関心のある人が必要な情報と資源を得られるコミュニティを作る
- 2) 情報の共有や協力のために世界各地の市民科学コミュニティの公式パートナーとなる
- 3) 現在のアジア圏における市民科学プロジェクトの活動を発信するポータルを作る
- 4) 教育活動を通して市民科学の重要性を次世代に伝える

インターネット上では公式 Facebook サイト、Twitter、Medium さらにはニュースレターなど様々なメディアを通して活動の発信を行っています。オンラインジャーナルである Medium においてはプロジェクト情報、最新の活動内容、イベントや会議の報告など、定期的に記事が挙げられています。最初の公式イベントとして 2018 年 9 月に、日本の市民科学の第一人者である小堀教授を香港に招き、現地の市民科学プロジェクトや市民との交流を目的としたトークイベントを企画しました。CitSci.Asia にとってターニングポイントとなったのは 2018 年 12 月に香港にて行われた National Geographic 主催のワークショップでした。CitSci.Asia メンバー数人を含むアジア圏で市民科学に携わっている 30 人が選出され、

3 日間にわたってアジアで市民科学を浸透させる方法について活発な議論が行われました。このワークショップをきっかけに、新たな国のアンバサダー及び運営チームメンバーが加わり、組織として大きく前進しました。また、現在では国連のバックアップの元、Global Citizen Science Partnership (GCSP) の一員として ECSA や Wilson Center を始めとする他の国際的な市民科学組織と協力して持続可能な社会を目指した市民科学の発展に尽力しています。



National Geographic によるアジア市民科学ワークショップ

日本国内では、National Geographic をきっかけに活動に関わるようになった放射線測定市民科学プロジェクト Safecast と共催で 2019 年の 3 月に国内の複数の市民科学プロジェクトを招いたワークショップを企画し、非常に良い情報交換の場となりました

(<https://medium.com/citizenscience-asia/citizen-science-meetup-in-tokyo-33ba8b91dbf5>)。また、様々なオンライン記事や地方ラジオを通して市民科学の周知活動や、企業の CSR 活動の一環としてのワークショップなども行いました。現在では日本国内におけるネットワーキングをより強化していくため、日本支部の拡大及び引き継ぎに取り組んでいます。以下に CSR 活動の一環として行われたワークショップを紹介します。

<ビジネス×市民科学> 環境を色々な視点からとらえるワークショップの活動報告

2020 年 2 月 9 日に府中の市民活動センタープラッツにおいて、花王株式会社が CSR 活動の一環で展開する花王国際こども環境絵画展に合わせ、プラッツと農工大生有志の共催で<ビジネス×市民科学>をテーマにしたワークショップを行いました。

私自身も 2020 年 3 月まで所属していた東京農工大学には様々な学科がありますが、環境は共通して重要な課題として認識されています。このワークショップを企画するにあたって重視した点は、参加者に環境に対する新たな視点や価値観を得てもらうことでした。府中を中心に地域活動を行っている学生が主体となり、ビジネスコンテスト出場経験者を含む学生数人で具体的な環境課題に対して二つのアプローチで解決策を考えるワークショップをデザインしました。

多くの人々の生活に関わっている環境問題として、① プラスチック問題、② フードロス問題、③ 環境教育、④ 交通インフラによる環境問題の 4 つをピックアップしました。ワークショップではそれぞれの課題につき 1 つのテーブルを用意し、テーブル上にはその環境問題に関する情報を箇条書きにしたシートが 1 枚、その課題の解決のための市民科学プロジェクト例を示したシートが 1 枚、その課題に関する実際のビジネス例を紹介したシートが 1 枚の計 3 枚のシートが置かれました。参加者は初めにそれぞれのテーブルに割り振られ、各テーブルに主催者側の学生がファシリテータとして付きました。

フードロスの課題



情報シートの例

ワークショップの前半では、まず参加者のほとんどが馴染みのない「市民科学」についてのプレゼンを行い、実際のプロジェクト例などを交えながら紹介しました。この内容を踏まえた上で参加者には、活動主体や対象世代、実施期間など複数の項目が設けられたワークシートを用いて、各テーブルに置かれた課題を解決するための市民科学プロジェクトを考えてもらいました。ファシリテータは議論が行き詰った時のためのサポートとして配役しましたが、それぞれのテーブルで活発に議論が行われ、参加者が主体となって市民科学プロジェクトの具体的な活動内容までまとめていました。前半の最後では各テーブルの代表者が考えたプロジェクトの説明を行い、全体での共有を行いました。全テーブルの発表後、府中市選出の都議会議員、藤井あきらさんにそれぞれのアイディアの独自性や、実現可能性を踏まえて企画されている点について講評を頂きました。



ワークショップでのプレゼン様子

後半では、参加者が前半取り組んだ課題とは別の課題に取り組むために参加者にテーブルを変えてもらい、前半と同様、ビジネスコンテストに出場経験のある学生がまずは環境ビジネスに関するプレゼンをおこないました。環境ビジネスに関しても専門のワークシートを用意し、

市民科学ワークシートと類似した項目に沿ってビジネスプランを考えてもらいました。前半の市民科学パートと違った点はプラン完成後、①社会貢献性、②実現可能性、③持続性、④利益、⑤独自性の 5 点を頂点とした五角形のグラフでビジネスとしての評価を行ったことです。各テーブルの代表者によるプランの共有後、後半はプラッツ職員である林丈雄さんに各プランの特徴や、環境をビジネス化する観点について講評を頂きました。

前半の市民科学パートでは AI を活用し、消費者が主体となり食品の消費予測を立てることで需要と供給を一致させるプロジェクト案、後半では過剰包装によるプラスチック消費を削減するために、通販会社が通常包装と簡易包装の選択肢を作ることで、消費者の環境意識を高めると同時にコストの削減を実現するというビジネス案など、日本の独特の消費傾向や最先端の技術を活用したものなど、短時間であったにもかかわらず多くの良い発表がされました。

最後に、地域活動を通してワークショップ立ち上げのきっかけとなった学生によるまとめが行われました。このワークショップを通して「市民科学」という分野を知ってもらうこと、また、経済活動と対極にあるというイメージを持たれている環境もビジネス化することが可能であることを知ってもらいたかったことを伝えました。さらに、ボランティアベースである市民科学と、利益を追求する環境ビジネスという全く異なるアプローチで同じ課題に取り組むことによって、少しでも興味があれば、一個人として「環境」に携わる方法は幅広いという実感を得てもらうことにより、今後環境に携わっていく上での選択肢が広がることを願っています。

市民科学研究室の活動は皆様からのご支援で成り立っています。『市民研通信』の記事論文の執筆や発行も同様です。もしこの記事や論文に興味深いと感じていただければ、ぜひ以下のサイトからワンコイン（100 円）でのカンパをお願いします。小さな力が集まって世の中を変えていく確かな力となる—そんな営みの一歩だと思っていただければありがたいです。

[ワンコインカンパ](#) ← [ここをクリック](#)（市民研の paypal 支払いサイトに繋がります）